

ミスをする者しない者

わたしが問題にしているのは、ミスの社会的位置、及び影響、その後の対処、起こりやすい状況、予防策などではありません。ケアレスそのものです。同じ環境、同じ状況（当の本人の身体的状態も含めて）、同じ作業で、AはミスしなかったがBはミスした。なぜ？ わたしが話しているのは、AとBの違いと違いが生まれてきた過程です（まさに教育のテーマでは？）。まさしく人間はロボット機械ではないので万人が一様に同じくミスするわけではありません。今このときこの場でこの問題をAはクリアしBはミスした。ましてや、この1点を失えば自動的に10点を失うという時になぜBはミスを？ たとえて言えば、ここで誤れば先に進んで抜き差しならぬ窮地に陥ることが分かっている状況でBはケアレスミスをして死に、Aはより慎重冷静になって生還したのです。「落ち着いてすれば」出来たのだから能力測定の指標にはならない、のではありません。人間能力の立派な指標です。「落ち着いてできなかった」事が問題なのです。

わたしはこれは精神（人格と言い直してもいい）の問題と考えます（精神主義？は訓練の方法技術の一部？で、わたしの今の関心とは無縁）。AとBの経験が二人の精神を違うものにした。Aであるためには次の二要素の積み重ね（小事から大事へ次々と）が必須と信じます。

- 1 緊張した事態に自分で決めて行動する。
- 2 ミスの結果を引き受ける（そもそも悪しき結果がなければ当の本人にとってはミスでもない）。

ことのついでにミスの予防策について言えば、Bがミスしないようにするには予防策をレベル低く設定しなければならず、Aにとっては冗漫で能率がきわめて悪く、結局組織の機能を低下させます。人はだれでもミスをする、は事実でも事実の半分。人はだれでも同じミスをするわけではありません。入試でケアレスミスするようなら、それを越える人間能力が未だ養われていないのです。Bのまま社会人になったのち大ミスをして、やっとAになるようでは困りものです（実はこの期に至ってはAにはなりません。怖がってさらに低レベルに引き下がるだけです）。捲土重来、せめて入試ぐらいはケアレスミスしない者となってから社会へ出てきて欲しい。Bを引き受けてBに責任を持つ（管理責任）ことは遠慮させて貰いたく、彼のミスの標的となることも無論謝絶します。

（高等教育フォーラム 2001.06.21）